

# 魔法妊婦 ハラマセ∞ハラメント

上田ながの  
挿絵／瀬上大輔



立ち読み版



あまみやゆきな  
**雨宮雪菜**

5年前に魔法少女に変身して、人間界を混乱に陥れた魔人達を封印していた。現在は仲の良いお姉さん・なくあ家に居候している、ごく普通の女の子。



おおくも  
**大雲なくあ**

両親が海外赴任をしている雪菜の保護者として、いっしょに住んでいるお姉さん。



こたろう  
**小太郎**

魔法の国の住人。魔法少女スノーレインのパートナーとして、5年前に雪菜といっしょに戦っていた。



**スノーレイン**

雪菜がハートフルロッドの力で変身した姿。



アトラックII ナチャアトラックII ナチャ

女郎蜘蛛型魔人。  
全ての魔人達を統べる最強の魔人。



キモオタ怪人

超がつくほどのロリコンである。



犬魔神

高い身体能力でスノーレインを苦しめた。



プロフェッサー

人体を使った実験と肉體改造が得意。



豚魔人

女性にペニスを舐めさせるのが大好き。



戦闘員

魔人の魔力によって生み出された。



木人男

植物のツタのような触手を操る。

# CONTENTS

- 
- ★ 第零話 散々Hされたんですもの、できないはずがないじゃない
- ★ 第一話 人質を取られたら、そりゃこうなるしかないでしょ
- ★ 第二話 ロリツ娘相手？ 我慢なんかできないっつての！
- ★ 第三話 ホワイトミルクをゴックン!! あれ？ こんなに美味しかったっけ？
- ★ 第四話 人体改造するなら、やつば病院でしょ♥
- ★ 第五話 やつばり触手でクチュクチュは外せないよね
- ★ 第六話 夏はやつばり輪姦学校
- ★ 第七話 夫婦に必要なのは愛だよ愛！
- ★ 最終話 二人の幸せな生活
- 008  
039  
084  
125  
168  
200  
234  
266  
315



# 第一話 人質を取られたら、そりゃ こうなるしかないでしょ

仲間が吹き飛ばされたのを見届ける間もなく、背後から更に一人が近づいてくる。

「マジカルローリング……テリオスッ!!」

発動する魔力がまるでブーメランのような軌道を描き、スノーレインの背後へと飛ぶ。

「グアアアアアッ!!」

不意を突いていたと思ひ込んだ男に避ける間などなく、彼の身体は吹き飛んでいった。これで三人目。残った一人が呆然と立ち尽くす。

「こ、こんな馬鹿な……な、何なんだお前……一体何者なんだよ……」

「何者? 言ったはずだよ。私は魔法少女スノーレイン。あんた達みたいな悪い奴を浄化する為にやって来たんだ!」

「そ、そうかよ……。ちつ……。くそつ、畜生……。畜生めええええつ!!」

吹っきたかのかの様だった。男は絶叫し、ライフルをまるで刀のように振り上げて向かってくる。そんな彼に対し、スノーレインは左手を突き出した。

「マジカル……ギャラクティカファイニッシュ……ファントムウウウウツ!!」

B A G O O M !!

発動する魔力。その様はまるで爆風の様。男の身体などものともすることなく、あっさりとは吹き飛ばす。敵は悲鳴を上げる暇すらないままに、家の壁に激突して気絶した。

「ふうふう……」

一仕事終えたというように雪菜は大きく息をつく。

「やったなスノーレイン。流石や」

そこにどこからともなく小太郎が現れた。

「まだだよ小太郎」

しかし魔法少女は首を横に振る。

「あとは悪い心の浄化をしないと」

「ああ、そうやな」

スウツとスノーレインはハートフルロッドを振り上げた。

「そこまでだ、この変態魔法少女っ!!」

「へ？」

そこに向けられる新たな声。雪菜は発動しかけていた魔力を止められてしまう。

「俺のことを忘れてるんじゃないよ。この間抜け！」

そう言って声を上げていたのは、最初にバインドで拘束したはずの男だった。どうやら戦闘の最中に魔法が解けてしまったらしい。

「まだやる気？ 私に勝てないってのはもう分かったと思うけど……」

魔法少女はこの男に対しても魔法を行使しようと思いを集中させた。

「おっと、手出しはするなよ。もしそんなことをすれば、こいつらがどうなるか分かるな？」

しかし、溜めかけた魔力はすぐに霧散することになる。何故なら男の持った銃が、拘束された家族達へと向けられていたからだ。

「なっ、ひ、卑怯者っ!!」

「卑怯？ 結構だっつの。何とでも言え！」

「こ、このっ」

ハートフルロッドを握りしめ、魔力を集中させようとする。

「おっと、妙な真似はするなよ。抵抗すればこいつらの頭に風穴が明くことになるぞ」

男の指は引鉄にかかったままだった。魔法の発動と銃弾の発射——どちらが早いかは考えなくてもない。

「くく、しかし驚いたな。まさかまたスノーレインを拝めるとは思わなかったよ。何か思い出しちゃったよ。五年前のことを……」

男はこの家の父親に銃口を向けながら、そんな言葉を口にする。

「またって……お、思い出したって……わ、私のことを知ってるの？」

スノーレインの記憶は魔人封印のたびに消していたはずだ。魔人の存在や魔法少女の存在が世間に知られると様々な問題が起こることが予想されたからこそその処置である。それに……覚えていられると恥ずかしいこともいっぱいあったから……。なのに、思い出した？ 「ああ、知ってるさ、何で今まで忘れてたのかは分からねえが……俺は五年前にお前を目

の前で見てるんだぜ。ほら、覚えてるか？ あの時化け物が銀行に現れたのを……」

「……あ、あの時あの場所にいたの？」

五年前の銀行——忘れるはずもない。確か戦ったのは犬型半獣魔人だったはずだ。上半身が犬で下半身は人間という化け物が、金の匂いに釣られて銀行を襲った。

「ああ。当時俺も人質にされた一人だな。ホント恐ろしかったぜ、あの時は。助けてくれたことには礼を言うよ。それに……最高のものを見せてくれたからな」

語りながら男はぺろりと唇を舐める。男の言葉にスノーレインの白い頬はピンク色に上気していった。決して忘れられない記憶が蘇る。

銀行での戦い——人質を取られた雪菜は、魔人に対して無力だった。抵抗すれば人々が危ない。人々の為に、雪菜は自分を犠牲にしたのである。人質を救いたければ、肉体を差し出せという魔人の命令に従い——。

「お前は本当に感じてたよな。まだ餓鬼だったのに淫乱な牝そのものだった。まるで犬の交尾みたいにズコズコチンコ突っ込まれてよお。ホント気持ちよさそうだったぞ。なあ、あれを今度は俺で再現してくれよ」

ハートフルロッドを奪われ、人々の前で魔人に犯された。あれを再現しろと言う。この家に住む、ごく普通の家族達の前で……。

「そ、そんなこと……」

自然と視線は男の股間へと向かってしまった。既にズボンのその部分は膨れ上がっている。五年前に散々陵辱を受けてきた雪菜は、ズボンの膨らみだけでそのペニスがどれ程の大きさなのか容易に想像できてしまう。

(や、やだ……またあんなのやだよお……)

当時の嫌悪感が蘇ってくる。

「別に無理する必要もないぞ。やりたくないならしなくていい。これでもよかつたらな？」  
銃口が父親のこめかみに押しつけられる。父親の口からは「ぐうう」という呻き声が出た。

「……わ、分かったよ。言うとおりにする。だ、だけど……その人達には絶対に手を出さないでよね」

「スノーレインツ!!」

小太郎が焦りの声を上げる。

「大丈夫だよ小太郎。私は大丈夫だから」

そんなマスコットに魔法少女は微笑んでみせた。



「すげえな……あの頃はホントぺったんこだったのに、今ではこんなに大きくなっていると  
は……時の流れつてのは偉大だねえ」

(み、見られてる。お、おっぱい見られちゃってるよお)

人質を取られた雪菜は抵抗することもできず、男によってハートフルロッドを奪い取られてしまった。小太郎も縛られ、猿ぐつわをされた状態で拘束されている。

そんな状態で魔法少女は男に命じられるがままに、衣装を左右にずらし、乳房をさらけ出していた。魔法衣に押さえつけられていた巨乳が零れ落ちる。白い胸。掌にも収まりきらない程にそれは大きい。それでいて一切垂れることなく、ツンツと上向き加減の張りを保っている。乳房には染み一つ存在しない。乳頭は美しい桜色。絶妙なバランスを保つ乳輪が白い肌に彩りを添えていた。

「あ、あんまりみ、見ないですよ……」

男の視線がねっとり乳房に絡みつく。恥ずかしいし気持ち悪い。

「最高の胸だな。どんだけ揉まれたら、こんなヤラシイ形になるんだ？」

「も、揉まれなんか……」

男の言葉には嫌悪しか感じない。

「嘘つくなよ。ほら、こうして揉まれてるんだろ？」

こちらの言葉など信じてもらえない。男は舌なめずりをしながら、伸ばした腕で乳房に触れてきた。

「あんっ」

途端に全身に痺れが走る。口からは甘味を含んだ悲鳴が漏れた。

「おいおいなんだよ。ただ触っただけだぞ。これだけで感じてるのかあ？」

「か、感じてなんか——そ、んっんっんっ……そんなことないよっ！」

否定の言葉を口にするのが、その最中にも男が指で乳首を弄んでくる。指でつまみ何度も転がしたかと思うと、シュコシュコと扱しごいてくる。そのたびに魔法少女は身をくねらせ、何度も「あっあっ」と嬌声を上げてしまった。

（こ、こんなの……き、気持ち悪いだけ、イヤなだけだよ。な、なのに……何なのこれえ？  
お。おっばいがジンジンしちゃうよお……）

他者に肉体を弄ばれるのが五年ぶりのことである。指から伝わってくる男の体温を感じるだけで、プルップルッと乳房は痙攣するように震えてしまっていた。

「想像以上に敏感だなあ。まあでも当然か。何せあの時、あの化け物に散々乳首を調教されてたもんなあ。こんな感じでよお」

その反応に男は満足そうに頷くと、指ではなく今度は唇を乳頭へと近づけてくる。乳首にかかる鼻息がこそばゆい。男の口が開く。伸びる真っ赤な舌が、転がすように桜色の突起に触れた。

「あっ、そ、それはだ——ひゃんっ」

指で弄ばれた時以上の疼きが走る。どこことなく表情も官能に蕩けているように見えた。



### 第三話 ホワイトミルクをゴックン！ あれ？ こんなに美味しかったっけ？

「な、何だ!？」

ハートフルロッドが反応したのはこの時である。持っていた杖を、富田の膝にそれとなく当てた。♥部が左回転し、悪のエナジーが解放される。黒光が富田を包み込み――。

「ぶひっ！　ぶひひひっ!!　思い出した！　思い出したぞスノーレンツ!!」

風俗店店長は魔人として覚醒した。

ぶくぶくと身体が太り出す。紫色のスーツに赤い蝶ネクタイ。鼻が付き出し、耳が垂れる。頬肉が不気味なくらいに垂れ下がった。人の姿ではない。

豚と人間の半獣魔人――それが富田の正体である。

「そうだ。そうだったなあ。確か五年前も、こうしてお前にたつぷり口奉仕をさせたな。ぶひ、ぶひひひ」

五年前――あの時は富田の魔力に操られ、身体を自由を奪われた状態で風俗プレイをやらされた。一体どれだけ精液を飲まされたか分からない。

「あの時のことが忘れられなくて、またやって来たのか？」

「ち、ちがふ……そうじゃない……んぐっ、んむむ……」

否定しながらも肉奉仕を続ける。取り敢えず父親かどうかを確認する為には射精をさせなければならぬ。何を言われても行為を中断することはできなかった。

「じゃあ何の為にこんなことをしてるんだ？　まさか本気で働くつもりなのか？」

「う、うん……んも、おつ……んじゅつ、ふじゅう……そ、そうなんれしゅう……ら、らから……んちゅんちゅ、は、はやくらひてくらはい……」

ペニスを咥えたまま魔人の問いかけに素直に頷く。

この時、咥えている肉棒の形態も変化していた。人間形態時よりも大きく、臭く、苦くなっている。小さな雪菜の口には正直大きすぎるペニス。それでも必死にジュポジュポと音を立て、フェラを続けた。

「なるほどな。こんな仕事までしないとイケナイとは、魔法少女も大変なんだなあ。ぶひ、ぶひひ……」

口腔から引き抜かれた肉棒は唾液に塗れて妖しく輝く。舌尖で刺激するたび、ビクンビクンッとペニスは震えた。

「そうらよ……ら、らから……じゅぽつ、んじゅぽつ……ど、ろう? きもひいい?」

咥え込んだ肉棒を口腔粘膜に押しつける。プクリッと頬が内側から膨れ上がった。そんな状態で魔人に問いかける。

「駄目だな」

が、返ってきた答えは冷たいものだった。

「そんな生ぬるいフェラじゃ、いつまで経ってもイクことはできないな。お前、下手になつたんじゃないか? ぶひひひ」

全然駄目だというように豚魔人は首を横に振る。

「そ、そんなことないよ。こ、これでもっ！ ぶふっ、んぶっんぶっ……んおっおっ」

はつきり気持ちよくないと言われると悔しい。さっきまではあんなに上手だと言ってくれたではないか。こっちには色々な経験があるんだ。こんなことで引いてはられない。

じゅぶっ！ じゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっ！

窄めた唇で肉茎を締めつけながら、淫らな水音を立てて激しく首を前後に振る。口端から涎を垂れ流すことも厭わない。肉先が食道を塞ぐ程までにペニスを啜え込んだりもした。(で、射精ない。何で？ 何で射精さないの？)

確かに肉棒は勃起し、舐められるたびにビクビクと反応を見せる。しかし、射精するよ  
うな気配はまるでない。

「んぶはあっ……ど、どうして？」

思わずペニスを放し、呆然と呟いてしまっていた。

「どうして？ そんなのは簡単なことだろ。お前が五年間も怠けていたからだ。餓鬼の頃の方が上手かったぜ……すっかり腑抜けたフェラをするようになって……はあああ……これじゃあ、あの時散々仕込んでやった甲斐がないってもんだ」  
本当ががっかりしたといった様子で富田は首を左右に振る。

「じ、じゃあどうすればいいの？」

悔しかった。これでも結構負けず嫌い。このままではいられない。とはいえ、自分一人ではどうすればいいのか分からないので、スノーレインは魔人に問いかけていた。

「そんなものは簡単だろ。練習あるのみだ!」

「れ、練習? で、でも……どこで?」

そう簡単にフェラの練習などできるモノではない。

「どこって……ここをどこだと思ってるんだ? ぶひ、ぶひひひ」

豚魔人は不気味に笑った。



何事も上達するのに大事なモノは、一にも二にも練習であり、場数をこなすことである。それはフェラチオにだって当てはまる。魔人をイカすだけ口奉仕技術を得る為に、何人もの男をイカせればいい。

(ほ、他の人のまで舐めるなんて……そんなこと考えてなかった。は、恥ずかしい……) 雪菜は店内に用意された個室の中に一人座りながら、戸惑っていた。正直富田以外の相手など想像もしていない。

(……でも、あ、赤ちゃんの為だから……)

個室は一人用。魔法少女が座るスペースしかない。そんな部屋の壁に小さな穴が一つ空いていた。

「じゃあ行くぞ。頑張ってくれよ、スノーレイン」

この穴からペニスが出てくるらしい。それに対してフェラを行う。それが魔人の用意した練習法だった。因みにこの個室、外からは雪菜の様子が見えるマジックミラーになっているらしい。自分は見えないのに、相手はこちらの痴態を見ている。正直恥ずかしかった。「い、いいよ。いつでも来て！」

それでも魔法少女は怯まず、外の魔人の声に頷く。これに合わせるように、穴からそれが姿を現した。

（お、大きいオチンポ……凄くカリ首が太くて……本物のキノコみたい）

勃起した肉棒である。これから与えられる快樂を予見してか、ヒクヒクと肉棒は震えていた。

「い、いくよ……ん、んちゅう……んんん」

小さな口をいっばいに開く。魔法少女は躊躇することなくパツクリと肉棒を咥え込んだ。「うあっ」

男が感じる声が聞こえる。相手は店の客だ。

（た、たつぷり気持ちよくしてあげるからね）

やるからには本気である。全力を口奉仕へと傾けた。五年前に散々仕込まれた奉仕術を必死になって思い出しながら、肉茎に舌を這わせていく。

(カリ首を締め上げて、肉茎をなぞる。亀頭は優しく甘噛みしながら、唇で全体を扱き上げる)

じゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽっ!

首を前後に振り、肉茎を何度も擦り上げる。グチュグチュと口腔内に唾液を分泌させ、ペニス全体を濡らしていった。

「んもっ! んぐっ、むふうう……はあはあ……どう? き、きもちいい? おおきくなっへるよ。わたひのくひのなかで、ていんぽがおおひふ……」

男性器は奉仕に対して素直に反応する。膨張していく亀頭。カウパー汁が溢れ出す。舌に心地よい苦味を感じた。

「だひて……いっぱひわたひのおくひにだひて……」

確実に男は射精に向かっていている。雪菜はそれを察知すると、頬を窄め、激しくペニスを吸引した。ジュズルルツと音を立てた、ザーメンの最後の一滴まで搾り出そうとするかのようなバキューム。

そして――、

どびゅっ! ぶびゅぶっ! どっびゆるるっ!

「んぼっ! ぶふっ! んぐっ! んぶぶぶうっ!!」

肉棒がポンプの様に痙攣しながら、雪菜の口腔に向かって白濁液を発射した。

(で、射精てるっ！　せ、セーキが、精液が私の口の中に射精てるっ!!)

口腔を埋め尽くす濃厚牡汁。舌に絡み、口腔粘膜と混ざりあい、菌茎に染み込む。

「は、かつ、かはっ！　んげっ、げほっ、げほおおっ！」

液体というにはそれはあまりに濃かった、肉棒が口から引き抜かれた瞬間、何度も咳き込んでしまう。

「おいおい、ちゃんと飲むんだぞ。勿体ないことはするな！　ちゃんと飲めるようにならないと、俺のものに奉仕する機会を与えんぞ」

こちらの様子を監視している魔人がそんな言葉を向けてくる。

「わ、わかっ——うぶっ……わ、かつたよ……」

目的は魔人への奉仕だ。イヤだけれど拒絶はできない。

(の、飲まなくちゃ……これを飲まなくちゃ……)

ごきゅっ……ごくっごくっごくっ……

「んえっ、に、にがひ……そ、それに、す、凄く濃くて……く、口の中に絡みつくよ……」  
少しでも気を抜くと戻してしまいそうだった。込み上げてくる逆流感に堪えながら、最後の一滴まで飲み干そうとする。

「んご……んっんっんっ……」

クチュクチュと濃厚汁を口腔内で飲みやすいように混ぜ、何度も喉を鳴らす。

ぐちゅ、ぶぐちゅるう……ごくつ、ごきゅごきゅごきゅ……。

喉奥から食道に熱気が広がっていく。その感触に気持ち悪さを覚えながら、何とか飲み干す。

「うええ……ご、ごちそうさまでした……」

自然と食後の挨拶が口をついた。

するとそれに応える様に、新たな肉棒が穴の中から突き出される。先程よりも太さはないモノの、長さのある肉棒だった。弓の様に激しく反り返っている。

「客は一〇〇人だ。しつかり頼んだぞ」

絶望的な数字が聞こえた。

「ひ、一〇〇人……そ、そんなあ……で、でも……わ、分かったよ……んもお」

それでも魔法少女は諦めない。二人目の肉棒を口に啜えた。赤ちゃんの為にはやるしかない。先程の精液の味が残っている口腔内に、再び広がる生臭さ。

「うほっ、あ、温かいよお嬢ちゃん。そうそう、もつと唇で締め上げて」

男が悦びの声を上げる。

(臭いよ。す、凄く臭い……な、何なのこれえ)

「う、うええええ」

今度のペニスは異常なまでの臭気を放っていた。匂いだけで頭がおかしくなりそうな気

がする。けれどまだ二人目。ここでやめるわけにはいかない。

「おえっ、う、うぶっ、うぶええええ……」

気持ち悪すぎる匂いに吐き気さえ覚えながら、魔法少女は何度も口淫を繰り返した。皮肉なことに、舐めれば舐める程匂いも増していつてしまったのだが……。

むちゅっ、ちゅぽっちゅぽっちゅぽっ！

嫌悪感を覚えながらも、何度も顔を前後させる。口唇を使い、何度もカリ首を撫で上げた。チュポンッと音を立てて肉棒を口腔から解放する。するとビョンッとバネでも入っているかの様に肉棒は跳ねた。

「も、もういちろ……んふっ、ちゅっちゅっ、んちゅう……」

再び肉棒を啜える。肉棒の付け根まで喉奥に飲み込んでいった。そこから一気に肉棒を引き抜いていく。裏筋から肉先までを唇で愛撫していった。

(し、染み込んだじゃうよ。匂いが口に染み込んだじゃう)

臭みが自分の身体を侵食してくるような感じがする。だから長い間啜っていたくはない。再び肉棒を口から引き抜く。

「ぷはっ……げほっげほおっ！」

当然跳ねる肉棒。それがペチッと鼻先に当たった、グチュツという感触が伝わってくる。「あ、も、もう少しでイきそうなんだから、啜え直してよ」

「わ、分かってるよ……ん、んじゅ、もごっ、んじゅるう」

咳き込んでいても男は容赦してくれない。おねだりをされれば、それに応える以外に道はなかった。魔法少女は再び肉棒を咥え、先程と同じ行為を何度も繰り返し返す。

じゅぽんっじゅぽんっじゅぽんっ!

肉根から亀頭まで擦り上げるたびに、肉棒はその大きさを増していった。そして――、  
「で、射精るっ!」

ぶびゅばっ! どびゅっ! ぶびゅろおっ!!

「むひっ!! も、うもっ、むぶえっ! うべええええっ!!」

(ああ、く、口の中に広がってくる……せ、精液も凄く臭いのお)

口腔に広がる白濁液の匂いも強烈だった。腫が見開かれる。喉奥を叩く白濁液の感触に、意識が飛びそうなくらいだった。

「ま、まじゅい……しゅ、しゅごくまじゅいよお……」

そんな白濁液を必死になって流し込む。飲んでる最中にも何度もおええっとかき込み、零しそうになってしまった。

「さあ、次だ」

が、それでもまだ二人目。すぐに三人目のペニスに差し込まれてくる。今度は匂いがきついただとか、でかいだとか特筆すべき点がないペニスだった。

「ね、ねえ、ここは手袋でやってくれないかな？　ふえ、フェラはあんまり好きじゃないんだ。気持ちのいい手袋でお願い」  
ただ、おねだりが変わっている。

「手で？　は、はい……」

（お口じゃないからいいかも……）

唾えるよりはマシな気がした。手を伸ばし、肉棒を握る。

（す、凄く熱い）

手袋の上からでも、はつきりと肉棒の熱気が伝わってきた。

シユコツシユコツシユコツ……

熱を感じながら手淫を開始する。

「ああ、た、堪らない。手袋のスベスベした感触が堪らないよお」

すぐさま男は悦びの声を上げた。肉棒も硬く、猛り始める。

（も、もう出てきた……）

ピクンピクンッと掌の中で震える肉棒。先端からはすぐに先走り汁が溢れ出す。ネットリとした濃厚汁が、ヌルヌルと手袋に染み込んでくる。

ネチャツ、ニチャアア……

肉茎を扱くたびに、妖しげな水音が響き渡った。ネットネットになった手袋がピタリと掌に

貼りつく。

(うう、す、凄くドクドクいつてる……)

肉棒の脈動が伝わってくる。扱けば扱く程、心臓の高鳴りのようにペニスの鼓動は激しくなっていく。手袋越しなのに、肉茎に血管が浮かび上がっていることまで分かっている。そして――、

「ああ、で、射精るっ!」

どびゅっ! どつびゅどつびゅどびゅる!

男が射精を開始する。ビクビクツと掌の中で肉棒が震え、大量の白濁液を撃ち放った。「きゃああっ! あ、熱いっ!! ああ、手が火傷やけどしちゃうよお」

掌が白濁液でべとべとになってしまふ。液体というよりもゼリーに近いくらいに濃厚な汁だった。

「そ、それを舐めて、舐めてよ。手袋にいつぱい付いた精液を舐めて」

「……は、はい……」

魔法少女は自然に頷くと、自らの掌にべつとりと付いた白濁液に舌を伸ばした。手袋にべつとりと染みついた臭いに鼻孔が刺激される。少女は思わず舌を伸ばしていた。

ちゅくつ、ぺちゅつ、べろちゅうううっ!

「ずちゅる、んじゅじゅじゅ、か、絡むよ。喉に絡む。んちゅつ、ちゅずるう」

手首に舌先を付け、掌までを一気に舌先でなぞる。舌を使って濃厚汁を搦め捕り、ズルと男汁を吸った。指の一本一本までを丁寧舐め取っていく。

「あ、が、我慢できない！ その姿エロすぎるよお」

どびゅっ！　ぶびゅばああっ！

そこに追い打ちをかけるように、再び男が射精をする。

「ひゃっ……あ、か、顔にベツタリ……や、やだ、やだよお！」

放たれた肉汁は、スノーレインの顔に降りかかった。鼻先からポタポタと精液が落ちていく。慌てて雪菜は手袋でそれを拭い、先程のようにピチャピチャと舐め取った。

勿論それだけでは終わらない。すぐさま次の肉棒が差し込まれる。今度の肉棒は大きさも普通、匂いも普通、見た目も非常に綺麗なモノだった。あまり使っていないらしい。

「はあはあはあ……い、いきますね」

少し安心感を覚えながらそれを啜える。生温かいペニスの味が広がった。ジュボジュボと音を立て、奉仕する。

「あ、も、もう射精ますっ！」

射精までが早い。すぐに男は限界を告げてきた。ビクンツとペニスが震え、白濁液が溢れ出す。

（また、苦い味……で、でもこれくらいなら……）

先程のモノに比べれば、辛いことなど何も無い。雪菜はペニスを咥えたまま、ゴキユゴキユと喉を鳴らして再び白濁液を飲み干していった。

が――、

「じ、じゃあこれも受け取ってね」

じよ、じよぼつ、じよろろろお……。

「んぶつ! も、うむおつ! もぼおおおつ!!」

今度流し込まれたのは、白濁液だけではなかった。何と男は肉棒を雪菜に咥えさせたまま、排尿を始めたのである。

(お、おしっこ!! き、汚いっ! いやっ、き、汚いっ!!)

思わず雪菜は咥えていた肉棒を放す。しかし、その為、結果的に男の小便を全身で受け止める羽目になってしまった。

「んびゃつ! や、く、臭い! こんなはやめ――んぶつ、ぶえええ!!」

びちゃびちゃとアンモニア臭を放つ汚液が肌を叩く。魔法少女衣装に黄金水が染み込んでいった。

「ぶひひ、酷い有様だなあ。だが、まだまだ始まったばかりだぞ」

事実、そのとおりの言葉だった。

「う、あ……うえええ……」

正直自分でも一体何人の肉棒を啜えてきたのか、雪菜自身にも分からない。数えられたのは最初の数人だけ。一体どれだけの精液を飲んできただろうか？

白濁液が射精されたのは口腔内だけではない。顔にも散々かけられている。お陰でスノーレインの顔は、ザーメンでパックでもされたみたいにドロドロになっている。金色の髪にも濃厚汁が絡みつき、パリパリになつてしまつている。衣装にも液体は染み込み、ベツタリと肌貼りついてしまつていた。衣装の黒部分が白く染まつている。大きく開いた胸元を濡らす白濁液が、ツツツツと流れ落ちていた。

「ちんかしゅ……うえつ……はあつはあつはあつ……す、しゅごく、に、苦い。で、でも、んじゅつ、お、おいひいかも……」

何十人目かの相手は包茎ペニスだった。口で包皮を剥くと、ピンク色の使い込まれていない亀頭が露わになる。ただ、問題はその先端部にべつとりと黄色い恥垢が溜まつていることだった。

(き、綺麗にしてあげないと……)

家の家事は、なくあとの持ち回りであるが、なくあは全然家事というモノができない。掃除をしても逆に汚すことが常だった。後から掃除するのは雪菜である。その為なのか、雪菜は汚れているモノを見ると綺麗にしたくて堪らなくなつてしまう。

べちゅ、くちゅつくちゅつ、ちゆるるる……むちゅう……。

「んうっ、むふうっ……ぼ、ボロボロ取れる……汚いのがこんなに取れるよ……」

舌先で汚い垢を掬い取り、剥がした。頭がクラクラする程それは臭い。そんなものを飲み込み、分泌させた唾液と一緒に喉奥へと流し込んでいく。

味覚が痺れそうな味だった。

（こんなの食べたら身体に悪そう……でも……どうして? この味、何だか凄く久しぶりで……やめられないよ……）

恥垢だつて何度も食べさせられている。

思い出すのは昔の記憶だ。

『やだ、こんなの食べたくないよお。こんなのやだあ……んえっ、んじゅつ、んぶええ』  
五年前の雪菜は豚魔人によつて身体の自由を奪われ、一般人達に同じような口奉仕を強要されていた。瞳にいっぱい涙を溜めながら、少女は肉棒に舌を添える。

『不味いの! 苦いのお!!』

『それがいいんだろ? 美味しいんだろ?』

『そ、そんなこと……うえっ、うえええっ! そんな、な、こと……ないの、き、気持ち悪い。気持ち悪いからや、だああ!! うおえっ、うおええ……』

本当にイヤだった。自分のお腹の中まで穢されていくようで耐え難い行為だった。

だというのに、今は自分から積極的に同じ行為をしている。それどころか、舐めれば舐める程、雪菜の身体は熱く火照っていった。

ジュンツと秘部が濡れていくのが分かる。

(ああ、身体が、身体が疼いちゃうよ……)

「んもっんもっんもおっ！」

そんな自分自身の感覚を誤魔化す様に、必死に魔法少女は肉棒を咥え続けた。

「どうだ？ 一週間洗っていないチンポの味は？ 美味いだろ？」

「お、おいひいでしゅ……ザーメンchenkashゅおいひいでしゅ……んちゅつ、んちゅう」

否定の言葉が出てくれない。それどころか、自分の言葉を肯定するかの様に、雪菜は舌先で恥垢を搦め捕ると、それを美味しく味わうかの様にズズツと何度も吸った。

ぺちゅつ、ぐちゅぐちゅ、んごきゅう……。

舌先でチンカスを転がし、唾液や先走り汁、口の中に残った白濁液と一緒に飲み干していく。ゴリゴリとした塊が喉奥を通過していくのが分かった。

(こ、こんなの食べたら病気になるちゃうよ。でも、何でやめられないの?)

餌を与えられた動物みたいになっつきながら、更に肉棒を吸引する。

「お、も、もう限界だ！」

これに男が限界を告げ――、



# 第五話 やっぱり触手でグチュグチュは外せないよね

(こ、こんな喉奥まで犯されちゃってる。か、身体が中から破裂しちゃうよお。そ、そんなに奥までやめてえっ!!)

必死の懇願も言葉にすることはできない。むごつむごおつと情けない悲鳴だけが周囲に響き渡った。

(い、イヤだ。こんなのイヤだよお……)

泣きたかった。これは父親捜しの為に必要な行為なのだと思いつつも、触手に玩具の様に扱われるのは本当にイヤだった。しかし、最早どうすることもできない。

ぐじゅっ! じゅぐじゅるう……。

「勿論こっちもだ」

唾えるだけで行為が終わるはずもなかった。木人は口元をニヤリと歪めると、触手を伸ばし膣口に密着させてきた。

「キキキ、すぐに最高の天国を見せてやるぞ」

魔法少女衣装の股間部が横にずらされる。そのまま魔人は何の躊躇をすることなく、雪菜の小さな陰部に対してあまりにも大きすぎる巨大触手を膣中へと挿入してきた。

「や、やめ——」

ぶじゅぐっ! じゅぼっ! ぶぐじよお……。

「おっ! むほっ!! んっんっんもおっ!!」

（あ、は、挿入ってくる……。大きいのが私の膣中に挿入ってきたっ！ こ、こんな無理だつて……。そんな大きいのは挿入らないの。だ、だから止まってよお!!）

身体が壊れてしまう。そんな恐怖すら覚えた。だから必死に止まってくれと願うのだが、当然聞き入れてはもらえない。それどころか、二本、三本と新たな触手が雪菜の膣口へと密着してきた。そのまま触手達は結合部に先端を押し当て――、

ぶぐじゅつ、ずぐつ、どぐじゅるうつ！

「むっひ！ お、おっおつ、そ、それい、それいりようは、はひらなひつ!! む、むひつ、こ、こふあれひやう。わらひがこふあれひや――むつ、おぼつ、おつ、おげえ」

挿入が始まった。肉襲が触手によつて限界まで拡張されていく。膣中に広がる巨大な異物感。圧迫されていく胎内。膨れ上がった膣道に膀胱が圧迫され、

じよぼつ、じよつじよつ、じよろろろお……。

「お、おひっこ、おひっこまれ、れひやつてるう」  
失禁まで始まった。

「ぐ、こ、この締めつけ！ し、触手が潰されそうだ。キキキ、まだまだだぞ！」

本人の行為はまだまだ終わらない。

ぶじゅぐつ、じゅずずずうつ！

「ひっ！ んっ、ち、ちくひっ……ちくびしゅわれてるのお……お、ま、まら、まらおつ

ばひでひゃうう」

触手が乳首を吸い立てる。乳房に広がっていく甘い快樂。すぐに乳頭は勃起を始めた。吸いついた触手の中でピンピンに勃起上がるサクランボ。魔法衣の上からでも勃起乳首がはつきりと分かる。最近頻繁に揉まれたり吸われたりしている為か、何だか乳房全体が大きくなっているみたいだった。實際感度は上がっている。

「あっ♥ あっ♥ あっ♥」

ほんの少し乳先に刺激を受けるだけで、魔法少女は何度も快樂の喘ぎを漏らす結果になつてしまった。

ぐぶじゅっぐぶじゅっぐぶじゅっ！

「んもっ！ お、おっく、おぐう」

（当たってる。子宮口に触手がキスしちゃうってる。や、やら、赤ちゃん……赤ちゃんと触手が挨拶しちゃうよ。そんなの駄目。あ、赤ちゃんにはこんなの見せたくない。見せちゃう駄目なの）

当然自分の子供にこんな淫らな姿を見せたくはない。何だかとてもいけないことをしている気分だった。

ただ、それでも魔人は止まってくれない。罪悪感を覚える魔法少女は矜る様に、より激しく触手を膣奥へと突き入れて来た。

「んぶひっ！ んぼっ、んっんっんおおっ!!」

（こ、こんなの駄目っ！ しちゃいけないことなのっ!! やだ、こんなのイヤなだけ。ぜ、絶対気持ちよくなんかないんだからあ）

けれど、膣奥を突かれると目の前が真っ白に染まる。ズンズンッと触手が蠢くたび、快楽を知ってしまったている肉体は愛液を分泌させてしまっていた。

「気持ちがいいんだろ？ キキキ、ほら、認めてしまえ。何を否定する必要がある？ これはお前が望んだことなんだろ？ こうして欲しかったから俺を復活させたんだろ？」

「そ、しよれっはあっ……」

そのとおりだ。確かにこうして欲しかったから、雪菜は魔人を復活させたのである。だってこれは――、

（あ、赤ちゃん……赤ちゃんのお父さんを見つけるのに必要なことだから。あ、赤ちゃんには絶対にお父さんが必要だから……）

「ほら、何を否定する必要がある？ 受け入れてしまえよ。快楽を受け入れれば、辛いことなんてなくなるぞ」

ずじゅごっずじゅごっずじゅごっ！

「んぼひっ！ ひっひっひっひんんっ!!」

語りながら魔人はピストンをより激しいモノへと変えていく。喉奥を塞がれ、乳房を吸

引され、膺奥を突かれると、思考が白く染まった。何も考えられなくなっていく。肉奥に与えられる快樂に身体が溶けてしまいそうだった。

それと共に木人の言葉が心の中に染み込んでくる。

「ひ、つよう？　そ、そうだよ……こ、これは……んっんっんっ、ひ、必要なことなんだ……だ、だって、赤ちゃん……あかひゃんにはお父さんがいないと……こ、これはしなくちゃいけないことなんだ」

父親を見つける為だという言い訳が、魔法少女に免罪符を与える。快樂を否定する必要などない。何故ならこれは赤ちゃんの為なのだから……。

膺壁が触手を締め上げ始める。いつしか口腔で肉茎を吸い立て、食道で肉紐を抜き出していた。何度も墮とされてきた肉体は、一度決壊すると早い。ダムが崩壊したかのように、魔法少女は醜悪な触手を受け入れ始める。

粘膜で覆われた触手が全身を這い回る。衣装はドロドロだった。晒されたボテ腹の上をグロテスクな触手が這い回る。身体中から溢れ出す汗と、滑り汁が混ざりあう。

「しからないの。こ、これはやらなくちゃいけない……いけらいことだから……だ、だひて……。いっぱひ、いっぱいしゃへーひてえ」

ぐじゅばっ、じゅぼっ、ぶむじよっ！　ぐもお……。

淫らな行為ではない。しなければならぬ義務の様なものだ。

（だ、だからオマ○コでいっぱい締め上げて、口でチューチューしていっぱいセーエキを絞り出すの。ああ、大きくなってる。身体の中で触手が大きくなってるよお）

太くなつていく肉茎。膨れ上がっていく先端部。射精が近いのか、ヒクヒクと震え出す。「そうだ。それでいい。ほら、もつとだ。もつと欲しいだろ？ 欲しかったらそれを口に出してみろ」

「だ、だひてっ！ わらひのにやかに、わらひのお、ぐひに……身体中に、ぶ、ぶっかけりええ！ ほ、欲しいの。気持ちいいの欲しいのお♥」

魔人の言葉に素直に頷く。肉触手の膨張を感じると、官能の炎がより大きく灯る。思い出すのは精液の味と熱気。思い出すだけで達してしまいそうになる。より愛液を分泌させ、口端から涎を垂れ流し、搾られた乳房をブルブル揺らしながら、魔法少女は射精を求めた。（あ、い、いい♥ いいの、触手いいの♥）

快楽を受け入れた為なのか、より肉悦が大きくなっていく。魔法少女は触手を求め、へこへこと腰を振る。

ちゅぽっ！ じゅずるるるうっ！

唇を突き出し、ジュースの様に肉棒を吸う。腔に力を込め、繰り返し肉棒を締め上げた。（射精して。私にいっぱい射精してえ）

これまでの父親捜しで思い出してきた男達への奉仕術を思い出しながら、魔法少女は射

精を求める。完全に魔人を犯していた。

(先走り汁美味しい。おっぱい吸われるのいいの。また、また出ちゃうから。ミルク出ちゃうからあ)

母乳を噴出した時の快楽が蘇ってくる。記憶に触発され、更に膣道が圧縮した。

「そうだ。いいぞ、キキキ……射精る。射精すぞ!! お前の膣中に射精してやるぞお」

魔人が射精に向かっていく。何度も肉触手が膣中から出し挿入れされ——、ぶびゅっ! どびゅっ! どっびゅっどっびゅっどっびゅ、どびゆるるるうっ!!

「んもっ! んおげっ! ふげえええええっ!」

(で、射精てる♥ わ、私の膣中に、く、口の中にセーキ射精てるうっ!)

射精が始まった。膣中に、口腔に、全身に——白濁液が降り注ぐ。

(あ、熱い♥ か、身体中が焼かれちゃうよお♥ セーキ熱すぎて火傷しちゃう)

熱湯を浴びせかけられているかの様。身体中が熱液で火照っていく。当然の様に埋め尽くされる子宮。食道から直接胃の中に白濁液を流し込まれているみたいだった。

「おうえっ! うべっ、うおえええっ! あ、い、いぐっ……わ、わらひ……か、身体中にせ、しえーしかんじて、い、いぐのっ♥ いっっちゃうのお♥ いぐの止まらないのお♥」

精液の熱気は少女を絶頂へ導くには十分すぎる。魔法少女は触手に拘束され、宙に浮いた状態のまま白目を剥く。ビクンビクンッと身体中を痙攣させつつ、キュウツと細身の肢

体を弓形に反らせながら、何度も潮を吹いて達した。

びゅばつ、びゅばつあああああああつ！！

「ひっ、お、おっばい！ おっばいもおおおっ！ とま、うおえつ、うぶつふおまらな  
いのお!! うおえつ、うえええつ！」

射乳まで同時に始まる。衣装に染み込む母乳。黒い衣装が溢れるミルクで白く染まった。染み込んだ母乳が衣装を抜け、触手を濡らす。雪菜は瞳を見開き、腰を妖しく振りたくりながら、射乳の快楽に身悶える。と同時に食道を逆流した白濁液を、口から吐瀉していた。

「あ、ひ……い、いっだ……わだひ……まだイツちゃったあ……」

精液は鼻からも流れ出ている。両鼻から白濁液を垂れ流すなどという酷い表情を晒しながら、少女は満足そうにはあつと大きく息を吐いた。

「……あ、ち、ちがふ……おとうしゃんらない……」

肉紐に絡まれたまま暫く余韻に浸った後、ポツリッと雪菜は呟く。溢れ出す魔力光。色は虹ではない。どうやら今度も外れだったみたいだ。

「……キキキ、いいぞ。なかなかよかった。だが……まだまだ、まだ終わらんぞ」

「へ、ま、まりや——んくひいいいっ♥」

全身を脱力感が包み込んでいく。が、これで終わりではなかった。再び触手が蠢き出す。「植物的なやり方で犯してやるう」

言葉と共に魔力の波動が木人を包み込む。

「ひやつ、な、なにこりえ？ ひ、ひやつ！ んひああつ！」

解き放たれた魔力が一つの形となった。一見するとそれは妖精のようにも見える。数は数十。大きさは男の掌サイズくらいだろうか？ それらの妖精が木人から自分の身体くらいの大きさをした卵の様なモノを渡され、小さな羽を羽ばたかせながら宙を舞い出した。妖精達が卵を運んでいく先は、当然牝の花弁だ。

雪菜の花弁は触手によって犯されたまま、開きっぱなしになっている。外側に捲れた肉壁の有様が無残だ。滴り落ちていく愛液が、まるで蜜の様に見える。

「さあ、受粉の時間だ」

妖精達は木人というおしべから卵という名の花粉を運ぶ羽虫だった。妖精達が次々と雪菜の膣口に取り憑いてくる。

ぐじゅつ、ぶぐじゅつ。

「た、卵……うあつ、た、卵来たあ……んひつ♥ くふ、は、入ってくるう」

花卉に取り憑いた妖精は、その卵を雪菜の膣中へと押し込み始めた。大の字に開かれた足に、掌サイズの卵が押し込まれる。滴る女蜜が卵に絡み、あっさりそれを蜜壺へと導き入れていった。

「あ、温かい……卵あつたかいよお……」

精気の塊である木人の卵の温かみが、じんわりと下腹部に広がる。心地よささえ感じる感触だった。ただし、それは一個だけではない。

「ああ、また来た……また一個卵が……ん、ふううう……」

二個目の卵に戦おのきながらも、うっとり瞳を細めてしまう。更に三個目、四個目と卵が続いてくる。

「感じる。私のお腹に卵があるのが分かる……も、もう赤ちゃんがいるんだよ。こ、ここには赤ちゃんがいるのに……また卵なんか入れちゃいけないのに」

こんなことはしてはいけない行為だ。もう父親でないことは分かったのだから、もうやめなければならぬ。だというのに、どうしても心地よく「はあああ」という吐息まで漏らしてしまう。

ただし、それは三個、四個レベルまでの話である。問題はここからだ。ずごつ、ぐじゅごつ、ぐじゅずるる……。

「あ、ま、また？ あ、あんんっ、入ってくる。卵がまたあ」

五個目、六個目……妖精達は止まらない。魔人の卵を雪菜の膺中へと入れていく、その本能のみで動いていた。

一〇個、一一個……二〇……三〇……。

「く、くひっ♥ あ、お、お腹、お腹が、わ、わたひのおなっかが、は、破裂しちゃう。あ、

赤ちゃんがつぶ、潰れちゃうよお」

卵の量は尋常なものではない。入れられ続ける卵によって、より下腹が膨らむ程の量だった。既に膣道には入りきらない。子宮内も当然無理だ。膣口からは入りきらない卵がはみ出している。

ただ、そんな状態であっても妖精は止まらない。はみ出した卵を無理矢理膣奥に押し込めると、次の卵を秘部へと挿入し始めた。

ぐじゅぞつ、ぶじゅつ、どぐぶじゅうつ！

「だ、だから、こ、これ以上は、も、もほ……む、むっりだかつら、無理なのお！」

入る余地などない。既に膣内はぎつちり卵で埋まっているのだ。だが、妖精は言葉を受け入れてはくれない。見た目は可愛らしい妖精だというのに、立派な陵辱者と化していた。(に、逃げなくちゃ……私が壊されちゃう前に逃げなくちゃあ……)

恐怖すら覚える。しかし、逃走もできない。

「どうだ？ 気持ちがよかろう？ 女にとって卵を産みつけられるのは最高の悦びだからなあ」

キキキツと笑う木人によって、肉体は拘束されたままだからだ。

「は、放してえ!! ぐ、んつ、ひつ、わ、私のお腹が破けちゃうよお♥ あっあっあっ」  
自分の身体が壊されてしまいう。だというのに、膣中に圧迫感を感じれば感じる程、



雪菜の表情は愉悅に蕩けていった。腔壁に感じる卵の熱気が、快樂に変換されて身を襲う。腔道に卵が押しつけられられる程、嬌声が大きく、甘いものへと変わっていった。

ぶじゅつ！

「おっ——あつ……は、はい、はいっだ……ぜ、じえんぶはいっだあ……」

無理矢理すべての卵が押し入れられる。

「あ、つ……潰れるのお……お、お腹の中の卵、つ、つぶれひゃうのお……」

卵同士が互いを圧迫しているのが分かった。ピシッと殻に亀裂が入っていくのも理解できる。

「へ？ あ、な、何でこんな体勢……あ、赤ちゃんみたいな恥ずかしい格好……。やら、はずかちい格好やらよお」

そんな状態で動き出す触手。両膝を抱え上げ、股をM字型に開かされるといふ姿勢を取らされた。抱っこされておしっこをする子供みたいな姿勢である。

「その卵は精の塊。お前の中に俺の精がたっぷり注がれるさまを見せてもらうぞ」

「駄目。そ、そんなのや——あ、だ、だめっ、わ、割れる。卵、われ——」

姿勢が変わったのが災いした。これによって更なる圧迫が胎内の異物にかかり、それらは一斉に割れた。

ぶじゅつ！ ぶじゅばああああああああつ！！

「——んひよっ！ あ、あじゆっ、あじゆいっ！ あ、た、卵の、だまごのながらがら、あ、あじゆいえぎだい、しえーしでっできたあああつ♥ むっり、お、おおすぎっる、しえーじおおすぎるのおっ！ いっぐ、いぐいぐいぐ……」

破裂した卵から溢れ出したのは白濁液。尋常な量ではない牡汁が膣壁に染み込んでいく。全身が焼き尽くされてしまうのではないかという熱気を感じた。昂ぶった肉体を絶頂へと押し上げるには十分すぎる程の熱量。

「あー！ いっぐ、いっぐううううっ!!」

再びの絶頂。何度味わっても飽きることのない快樂が、魔法少女の心と身体を満たしていった。

そして――、

ぶじよぼっ！ じよぼっ、ぶじよばあああああつ!!

「ひっ、ひいひいっ！ で、でってる。お、おじっごみたいにでてるの♥ ぜーじがおじっごになってるのお」

開きっぱなしの肉穴から、多量の白濁液が噴き出す。まるで滝のような勢いだった。体勢も相まって、まるで白いおしつこのよう。膣口を飛び散る白濁液が刺激する。

「あ、あへっ、ま、まった、お、おしつこで、おじっこセーシでわだぢ、わだぢまら、まらいぐのおおっ♥ とまりやない。おじっごも、いぐのもとまらないのお♥」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

仙獄学園戦姫

ノブナガツ! comic



信長が、秀吉が、義一が、エツチにバトルにと漫画で大活躍！  
もうひとつの『仙獄学園戦姫ノブナガツ!』がここにある!!

# 待たせたら

毎月中旬  
発売!!

18歳未満の方は  
購入できません

18

漫画：老眼  
原作：斐之嘉和  
キャラクター原案：SAIPACO

戦うヒロインが屈服させられちゃうアンソロジーコミックス  
『闘神艶戯』偶数号にて連載中!

編集・発行 キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

<http://ktcom.jp/>

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/690円(税込)



全国書店で  
**好評発売中**

**少女天使の暴走が  
平和な学園生活を破壊する!!**  
シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

「小説…さかき傘 / 挿絵…天海雪乃」

思春期なアダム4 聖域の崩壊



「小説…さかき傘 / 挿絵…天海雪乃」

**呪詛喰らい師2**  
「小説:蒼井村正 / 挿絵:或十せわか」

全国書店で  
**好評発売中**

**凄腕退魔士の咲妃を  
牝奴隷に墮とす新たな敵の登場!**



全国書店で  
**好評発売中**

**クトゥルフの娘たちが  
学園祭でメイドさんに変身!?**  
ルルらちに新たな邪神が這い寄る!

「小説…羽沢向 / 挿絵…ヒエール☆よしあ」

魔海少女ルルイエ・ルル2

**既刊LINEUP**

- 仙道学園戦姫 / プナガリ ①~③
- ビルグリムメイデン ①~③
- 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです

- 思春期なアダム ①~③
- 呪詛喰らい師【カースイーター】
- 女神御用メルのセイイ征設計画!

- 借金お魔クリス ①~③
- 無敵の姫騎士がPMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット



あとみっく文庫

既刊情報

## 仙獄学艶戦姫ノブナガツ!

第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園——西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!! 平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたりで、とんでもない方向に進んで——!?

小説●斐芝嘉和  
挿絵●SAIPACo.

全国書店で  
好評  
発売中

## 仙獄学艶戦姫ノブナガツ! 弐

北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾く美姫>景虎、宇佐美く奈々>定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!! 敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●斐芝嘉和  
挿絵●SAIPACo.

全国書店で  
好評  
発売中

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトで <http://ktcom.jp/>



**仙獄学艶戦姫ノブナガツ!**

信玄、出陣!

北宮学園の生徒会長選挙戦も大詰め。肉欲に堕ちた義元と氏康を従えた景虎は、更なる戦力の拡大を図る。そんな中、信玄は元凶である按針を倒そうと信長に協力を求め、聖ジョウントのエリザは封印された化け物を発見する。様々な思惑が交錯する物語は佳境を迎え、信長は姦落の危機に陥るのだが!?

小説●**斐芝嘉和**  
挿絵●**SAIPACo.**



全国書店で  
**好評**  
発売中

**BLANGEL**

輪になりて踊る患者の夜

月下の街を紅に染め上げる、鮮血のサスペンスアクションの幕が上がる! 吸血姫アリシアは異形の生物「被験体」の影を追って戦い続けるが、予想もしない反撃に遭って虜囚の辱めに晒されてしまう!! 『隔月刊コミックヴァルキリー』の長期連載人気漫画が待望の小説化!

小説●**夜士郎**  
原作・挿絵●**渡瀬行人**



全国書店で  
**好評**  
発売中



## 思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田陸月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった！ ごく普通な少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する！

小説●さかき傘  
挿絵●天海雪乃



全国書店で  
**好評  
発売中**

## 思春期なアダム 2

背後をならう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、陸月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たな刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱！ “蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、陸月も新たな局面に…?

小説●さかき傘  
挿絵●天海雪乃



全国書店で  
**好評  
発売中**



## 借金お嬢クリス

42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円! クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに! 果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸

挿絵●了藤誠仁

全国書店で  
好評  
発売中

## 借金お嬢クリス2

42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル!? 水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍(?)に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸

挿絵●了藤誠仁

全国書店で  
好評  
発売中

# コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

## ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

## 発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



# 電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!  
来かねる場合がございます。い場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!